

パネル・ディスカッション話題提起：学生主体の学習活動における コミュニティ形成支援ならびにプロジェクト進行管理支援

原田康也 (harada@waseda.jp : <http://faculty.web.waseda.ac.jp/harada/index-j.html>)
早稲田大学法学学術院教授 (法学部英語・言語情報副専攻担当)・情報教育研究所所長

1. はじめに

大学生の学習上の技能ならびに社会人のビジネス・スキルとして、広義の情報処理能力に加えて、(対面または電話等のメディアを介した)口頭ならびに(メールなども含めた)文書での自己表現力と対人折衝力が求められることに多言は要さない。¹ 一方、大学生に限らず日本人一般の自己表現力と対人折衝力が不十分なことは、日常的に経験することである。大学教育においては、専門科目・語学・一般教育科目のすべてにわたってこのような技能の涵養が求められている。²

こうした技能が求められる典型的な場面のひとつは、ペアやグループにおける教室内活動における課題遂行であり、もうひとつは、ペアやグループにおける発表準備や課題達成であるが、そのいずれにおいても、学生同士の人間関係構築と協調的交流を徹底的に促す仕組みを授業内の活動として教員が準備しないと、その後の活動に支障が出るような状況が明らかとなってきた。

小学校などの『総合的な学習の時間』を初めとして、『調べとまとめと発表』の学習スタイルが広まり、大学においても、情報機器の活用と学生主体のグループ活動を中心とした授業実施手法が広く採用されている。学生のグループ活動は一定の期限までに発表やレポートなどの成果物を完成させることが前提となるため、コミュニティ形成とあわせて、学生がプロジェクト進行管理の手法を身につけることも求められている。

本稿では、学生のグループ活動に向けてコミュニティ形成とプロジェクト進行管理をどのように支援していくべきか、若干の問題提起をしたい。

¹ ここでいう自己表現力と対人折衝力の中には、一人対一人のペアにおけるもの、3人以上の小グループにおけるもの、学生全体などのグループにおけるもの、学生同士のもの、教員との折衝におけるものなど、さまざまな要素が考えられるが、これまでの授業実践の中から、これらの要素はひとつずつ整理して検討すべきであることが明らかになってきた。

² こうした問題意識から筆者が行ってきた提言のうち情報教育のあり方についての議論の詳細は [8] を、英語教育における筆者自身の試みについては [4] を、一般教育における筆者自身のこれまでの授業実践については [5]・[6] を参照願いたい。

2. 教室で『会話』をしない大学生

教室での『私語』が授業の妨げとなる大学がマスメディアの話題となってから久しいが、筆者が担当する授業での実感としては、学生同士の自発的な会話や交流が乏しく、活気に欠ける印象が強い。以下に筆者が法学部で担当する授業についての感想をまとめる。

1 年生必修の英語のクラスは、未習外国語の履修クラスを基礎に構成されるため、毎週 4 コマ(2004 年度生以降に適用される新カリキュラムでは 5 コマ) 同一学生集団で授業を受けるため、お互いがそれなりに顔見知りという状態であるが、後述するように、最初にことばを交わした若干名以外とは会話をするきっかけをもたないまま 1 年間で過ごすことも多い模様である。1・2 年生の選択必修の英語の授業では、それまで顔をあわせたこともなく、授業時間以外に顔をあわせることもない学生の混成集団であり、放置しておく、隣に座った学生と一言もことばを交わすことがないまま 1 年間の授業を過ごすことになる。

3・4 年生を対象とする英語 C (自己表現・対話・意見交換) では、比較的少人数のクラスで英語での発表と質疑応答をめざし、脱線しても構わずにかなり長い時間(45 分から 2 時間程度)を質疑応答にあてて行く中で、多くの学生が授業やサークル活動においてこうした経験をしてきていないことが明らかとなってきた。³

一般教育科目の『言語学』の授業では、学生の理解を助けるため 15 分ほどのレクチャーに続いて簡単な課題や練習問題を提示して、『その辺で相談しながら』進めなさいという指示を出していたが、わからないまま一人で黙々と課題に取り組み悶々としている学生が圧倒的に多かった。⁴

³ 法学部では「少人数」のゼミが多数設置されているが、発表者がレジュメを棒読みし、質疑応答が成立しないという状況も広く見られる模様である。

⁴ 今年度の言語学の授業では、学生を少人数のグループに編成して、毎週提示した課題の中からいずれかを選択して、インターネットや図書館で調べて、次回の授業で発表するというスタイルを取り入れたところ、興味深い効果が見られた。詳細は 11 月 27 日の分科会にて発表。[6]を参照。

2.1. クラス・コンパは何のため？

2002 年度 1 年必修の授業で後期終了近くなった時期に、日常的な話題について 3 人ずつのグループで意見交換を行う応答練習活動を 4 回ほど導入した。⁵ 意見交換のあと、かなりの時間は日本語で『雑談』していたが、周囲をうろつきながら様子を見ていると、無関係な話題に熱中していることはまれで、与えられた質問と関連する話題について日本語で話をしている模様であった。年度末のアンケートでは、この意見交換の時間が楽しかったと答える学生が極めて多く、この練習の結果クラス内に『新しい友人ができた』と回答した学生が各クラスで多数を占めた。⁶

このクラスが選択の授業で、週に一回この授業のためだけに集まるグループであれば驚くほどの結果ではないかもしれないが、未習外国語のクラスを基礎に編成されているため、少なくとも週 4 回は同一の比較的少人数の集団で集まり、クラス・コンパもすでに何回か開催したであろう 12 月の時点で 4 回だけ実施したこのような練習からこうした効果が得られるとは意外であった。

2.2. 友達 100 人できるかな？

上記の応答練習では、このほかにいくつかの注目すべき成果が見られた。このため、2003 年度の授業においては、当初からこの応答練習を組み込んだ。特に 1 年必修の英語の授業においては、毎時間学生のグループ構成ができるだけ異なるように一般的な指示を与え、一部具体的な指示も与えた。ところが、前期終了時点での学生アンケートでは自由記述で『もっといろいろなクラスメートと話がしたかったのに』という意外な回答が複数見られた。このため、2004 年度の 1 年必修の英語の授業においては、毎回の授業でグループの構成ができるだけ異なるように、座席配置表とそのバリエーションを事前に準備し、学生に提示している。

この応答練習を始めて以来、語学の授業というものについて、筆者の考え方は大きく変わってきた。関連すると思われるこれまでの経験を以下に示す。

⁵ 質問は筆者が英語で用意し、カードに印刷しておく。3 人のうち一人がこれを読み上げ、一人がこれに答え、一人が 45 秒の制限時間をチェックする。回答後、質問者とタイムキーパーの二人が回答者の応答を採点し、記録シートに記入する。ひとつの質問が終わると、役割を交代する。詳細は [4] 参照。

⁶ 授業時間中に記名で回収したアンケートであるので、肯定的な回答の割合が多くなる偏りについては割り引いて考える必要があるが、それにしても意外な反応であった。

- 2002 年度末には、授業時間内の練習のほかに補習・補講として 8 回、複数のクラス合同で応答練習（とそれに引き続く文章作成）を行う機会を提供したところ、出席状況などから参加する必要がないにも関わらずほぼ全回出席する学生が若干名いた。
- 複数クラスの合同で行う補講・補習では、他クラスの学生とグループを構成した場合、ただちに『新しい友達』となった場合が比較的多い。
- 学生同士がまだお互いに知らないときにグループの構成を学生に任せると、『お見合い』状態になって、さっぱりと始まらない。また、自分たちでグループを構成するよりは、教員の指示でグループを構成してもらいたいとの意向が見受けられる。
- ある年度に筆者の授業を受講した学生が、この応答練習をさらに続けたいということで、翌年度筆者の担当する授業を受講する例が多い。（今年度の 2 年生以上担当のクラスでは受講生の半数近くが前年度受講者である）
- 選択のクラスでは、出席率が圧倒的に向上し、これに伴って、脱落者が圧倒的に減少する。90 年代に表現演習ということで英語による文章作成を中心に授業を進めていたときは、受講者数も少なく、授業開始直後に脱落する者が若干名、その後年度末に向けて少しずつ脱落していく傾向が続いていたが、昨年度と今年度の授業では、脱落者数は極めて少ない。
- 筆者はこれまで上記選択クラスでクラス・コンパに呼ばれたことがなかったが、2003 年度のクラスでは年度内に 2 回そのような機会があっただけでなく、クラスが存続していない 2004 年度になっても一回集まっている。

2.3. コミュニティ形成支援の必要性

1 年必修の英語を除き、一般教育科目・英語選択科目の場合、学生は学年などをまたがった混成となり、それぞれ多くの授業を受講しているため、ひとつの授業を受講している学生の集団はコミュニティを形成しているとはいいがたい状況にある。一方、1 年必修のクラスは未習外国語のクラスを基礎とし、週 4 回集まることもあり、伝統的にはコミュニティを形成しているはずであったが、実態としてはそうでないことがここ数年の経験からも明らかとなってきた。この点は、クラス担任制度の見直しや法学部のカリキュラム改革の重点項目として『導入教育』の充実や『少人数教育』の徹底が謳われていることから、さらに詳細に検討する必要がある。

3. 『知的対話』のための教育

筆者は以下のような観点から法学部における英語ならびに一般教育科目の授業において学生間の実質的な相互交流を深める方策を模索してきた。

- 教養基礎演習的なりテラシー教育の必要性：引用の表記方法や出典の記載方法も含めたレポートの書き方とプレゼンテーション・ソフトの使用法も含めた口頭発表方法についての具体的な指導
- 英語固有の情報リテラシー教育の必要性：英文の入力編集から始まって、引用の表記方法や出典の記載方法も含めたレポートの書き方とプレゼンテーション・ソフトの使用法も含めた口頭発表方法についての具体的な指導
- 正解のない課題に対する取り組み：(マルチプルチョイスを中心とする)『問題』には常に『正解』があり、それを覚えることが『勉強』であるという大学入学までの誤った観念からの解放
- 『英語を勉強する』ということは試験問題に対する正解を暗記する、または試験問題に正解する方法を覚えることだという思い込みからの解放⁷
- 『英語を学ぶ』というのは、相手に何ごとかを伝える手段を広げるということである、ということを実感させる必要性
- クラスメイトとの本格的な意見交換：クラスメイトは競争相手であり、良い考えは他人に見せずに自分ひとりで隠し持つことが競争に勝つ方略である、という間違った考え方からの解放
- 発表・作文の相互チェック・相互評価：クラスメイトの作文を修正することが英文構成力向上の最善の手法であり、クラスメイトのプレゼンテーションを評価することを通じて、どのようなプレゼンテーションが聞く側にとってわかりやすいか理解することの重要性⁸

3.1. 情報検索リテラシーを重視した授業

別稿にて報告する 2004 年度の言語学の授業においては、学生のグループ学習の成果をクラス全体ではなくメタ・グループにおいて発表し相互評価用紙に記入し提出することで、クラス全員が毎週発表する機会を確保し、当該科目の学習内容に

⁷ 英作文の授業で与えられたテーマについて『自由に』文章を作成するという課題に年間を通じて取り組んできた学生は、年度末に『ひとつの英文を覚えることも強制されない不思議な授業だった』と記入した。

⁸ 文章や発表を相互にチェックし、コメントを記入する作業を『余計な時間潰し』と考えている学生は多い。

ついて理解を深めつつ、『教養演習』的な意味における自己表現力を養い、付随的に検索を中心とする情報リテラシーを身につける授業実施手法を試みた。⁹

中間レポートに見る学生のコメントからは、学生たちが経験から情報リテラシーに関わるさまざまな本質を学んだことが伺えるほか、共同協同作業のためのコミュニティ形成の重要性について体感したことが伺える。

- グループで情報を収集するにあたり、さしあたっての調整役に抜擢された私は、メンバーの相互連絡の調整や役割分担にあたったわけであるが、なかなかどうして、小学校から高校までの共同作業とは異なる部分が大きく、そういった観点からも学ぶべきものは大きかった。特にレジュメ製作者が欠席するなどのアクシデントなどにも見舞われ、調整役として何ができるか、何をすべきかについてはいろいろと考えさせられた。
- ... 最初は授業についていけないのではないかと不安もあり、... しかし ... グループ作業を中心とする、親しみやすいものだった。... 学習以外の面でもグループの人達と仲良くなれたり、信頼を深めあうことができたりしたのがとても良かった。
- ... 始めてこの授業に来たときは ... 驚いたし、... 少し不安がありましたが、グループに分かれている調べたり発表をしたりすることで責任を持って行うことができたりグループの人たちとも仲良くなれてよかったと思っています。やはりただ講義を聞くだけの授業とは違って自分で自主的に学ぶことができる授業はすばらしいと思います。
- 客観的なデータを対象として取り組むようなものではないものに対し、個人がそれぞれの異なった意見を他人にぶつけ、そしてそれを洗練していくというプロセスについて得るものが大きかった。メールでの議論では、そういった本質的な問題については、論点が曖昧になり、自分が言いたかったことがうまく伝わらないもどかしさが出てくるということに直面し、結局大学で集まるのは億劫だと考えていた私も、一度集まって直接議論することに賛成することになったのである。そして、直接議論することにより、自分の考えが抱えている矛盾や思い込みが明らかになり、他のメンバーの意見によって刺激され(ときには矛盾を指摘し)、それぞれの意見について隙がなくなっていくという感覚は面白いものであった。

⁹ グループでの発表をクラス全体に対して行うとなると、学期に 2 回から 3 回の発表に限られることが多い。それだけ準備に時間をかけた丁寧な発表をすることになる場合もあるが、発表に慣れていない学生にとっては、準備と発表を短期間に繰り返すことで学ぶことも多い。上手な発表を聞いて発奮することも、下手な発表を聞かされて退屈することも勉強になるが、発奮や反省を学期中に生かせないとなると、体験から学ぶことは難しくなる。

4. ICTによるコミュニティ支援¹⁰

2004年度の授業においては、1年必修の英語の授業、2年生以上の選択の英語の授業、一般教育科目の言語学の授業すべてを通じて、学生同士を毎回少人数のグループに構成して、お互いによく知り合い、なじむ時間をたっぷりと設定して、その後にグループでの学習作業を開始するように心がけるようになった。¹¹

2年生の英語選択授業では、前期には応答練習と少人数グループ内での発表を出発点として文章作成の基本練習を行い、後期には学生をグループに構成して各グループの興味に応じて調べた内容を発表し、文章にまとめるような進め方を試みている。過去の経験から、発表テーマがいつまでも決まらない、テーマが絞り込めない、分担した作業を担当者が完成させない、発表当日になって突然担当者が遅刻したり休んだりする、用意したはずのファイルが壊れているなどの事故がつきものである。従来は、こうした事故を体験することも重要な学習経験だと考えて、事故を想定した発表スケジュールを組んで来たが、今後は想定される事故をあらかじめ学生に示して、十分な対策を準備するような指導が必要かもしれない。¹²

現在 Zope をベースに blog と掲示板と Wiki からなる支援システムを試作・提供して、グループ活動ならびにコミュニティ形成支援にどのように活用されるか、小規模な試みを始めたところである。

該当の授業では、教室に 300 冊ほどの本を持ち込み、授業時間外に自由に読書を進め、その経過を報告する extensive reading の導入を試みている。¹³ 授業の開始時間に他の簡単なドリル練習とともに本の返却と貸し出しを行っているが、学生の中にはすでに読んだ本について情報交換を行い、その情報に基づいて次に借り出す本を決めるものもいる。本の感想をまとめ、感想に基づいて次に読む本を選択することはさまざまな意味で

語学的によい訓練になるだけでなく、広義のコミュニティ形成の第一歩でもあるので、blog などを利用して授業時間外にこうした活動を支援する仕組みの構築を当初より構想していた。今回の試みでは、Wiki などと比べて使い方がわかりやすいであろうという導入の意味も含めている。

blog のほかには、学生のグループ活動のスケジュール調整などにおいて利用することを想定して掲示板を用意した。このほか、Wiki も提供しているが、授業スケジュールの関係もあって、支援システムの利用方法そのものについて詳細に説明する時間はないため、今回は機能を提示し、発表内容の打ち合わせに利用できることを示唆することとどめている。Wiki については、機能や用法が必ずしも自明でないので、どのような利用法を学生が編み出すか、実験的な意味合いが強い。

5. 参考文献

[1] 片岡朋子・原田康也、「Web 情報におけるコンテンツとデザイン：ホームページ依頼作成実習の試み」、第 11 回全国大学情報教育方法研究発表会資料集, pp. 20-21, 社団法人私立大学情報教育協会, 2003 年 7 月.

[2] 片岡朋子・原田康也、「web page における文字テキストとアノテーション：「伝言ゲーム」と「ホームページ作成依頼」実習の試み」、平成 15 年度大学情報化全国大会事例発表資料集, pp. 170-171, 社団法人私立大学情報教育協会, 2003 年 9 月.

[3] 辰己丈夫・布施泉・中平勝子・原田康也、「e-Learning での活用を目指した情報倫理教育における『組問題』」、情報処理学会シンポジウムシリーズ / 情報教育シンポジウム論文集, pp. 207-214, No. 9, 情報処理学会, 2004 年 8 月.

[4] 原田康也、「エーワンのマルチカードを用いた英語応答練習」、情報処理学会研究報告 CE-69-3 pp.17-22, 情報処理学会, 2003 年 5 月.

[5] 原田康也、「prolog で学ぶ句構造文法」、第 11 回全国大学情報教育方法研究発表会資料集, pp. 42-43, 社団法人私立大学情報教育協会, 2003 年 7 月.

[6] 原田康也、「一般教育科目の情報化：情報検索リテラシーを重視した授業実践の試み」、平成 16 年度情報処理教育研究集会講演論文集（本冊子）採録予定, 名古屋大学主催・文部科学省後援, 2004 年 11 月.

[7] 原田康也、「Penguin Readers を用いた extensive reading の試み」、大学英語教育学会第 43 回全国大会予稿集, pp.166-167, 大学英語教育学会, 2004 年 9 月.

[8] 原田康也・辰己丈夫・楠元範明、「『情報教育』の情報化」、情報処理学会研究報告, Vol.2000, No.20, コンピュータと教育 55-6, pp.41-48, 情報処理学会, 2000 年 2 月. (平成 13 年度山下記念研究賞受賞)

¹⁰ 本節で報告する試みは河村まゆみ（早稲田大学第二文学部 4 年：2004 年 11 月 26 日現在）の提案に基づき、前野譲二（早稲田大学メディアネットワークセンター客員講師）の協力の下に実施中のものである。

¹¹ 短い期間に何らかの成果物をまとめるためには、相互の連絡手段確保が第一歩となるが、グループを構成した後に具体的な指示をしないと、連絡先の交換をしない。メンバーがそろわなかったために準備が間に合わず、発表できないということに対して、自らの責任と感じない学生が多い。

¹² 学生のグループ活動においても、責任分担を明確に文書化して提示するような訓練が必要かもしれない。この点については、[1]・[2] で若干言及している。

¹³ 詳しくは [7] を参照。